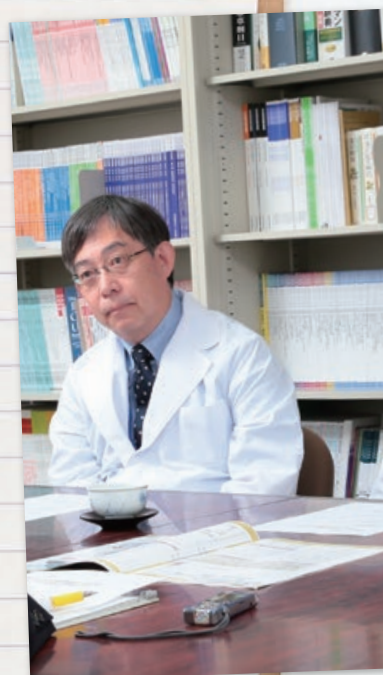


特別企画

医局紹介

# 鹿児島大学 漢方薬理学講座の 新たな取り組み

鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科 漢方薬理学講座 特任教授 乾 明夫 先生  
特任講師 安宅 弘司 先生  
特任助教 宇都 奈々美 先生



1868年に開設された薩摩藩医学校からの歴史を持つ鹿児島大学医学部・大学院医歯学総合研究科に、2018年4月、『漢方薬理学講座』が開設された。同講座は、同学心身内科学分野で長年教授を勤められ、わが国の心身医療の発展に大きく貢献されている乾明夫先生が特任教授として着任され、「医食同源」を含めた漢方に焦点を当てた研究がこれから進められようとしている。

本号では、これからの研究成果が期待される同講座の乾教授、特任講師の安宅弘司先生、特任助教の宇都奈々美先生に、現状の体制と今後の取り組み、そして将来に向けての抱負などをお伺いした。

## “やり残した”研究を完遂したい

乾 私が漢方と出会ったのは、もう四半世紀以上も前のこととなります。当時、臨床においては人参養栄湯などの漢方処方of有用性を実感していました。さらに、基礎研究においても人参養栄湯と神経ペプチドY (NPY) の研究を行っていたのですが、なかなか見るべき成果を出すに至りませんでした。その後、六君子湯の研究や漢方診療センターでの診療と、漢方との付き合いは長く続いているのですが、常に頭の片隅には“やり残した”人参養栄湯がありました。

退官時期が迫りつつある時期に、かつての“やり残した”ことをやろうと考えて、再度、人参養栄湯の研究を開始しました。とは言っても限られた時間内に研究を終えることが難しかったこと、2016年11月に発足した『フレイル漢

方薬理研究会』が軌道に乗り始めたこともあり、どのように研究を継続しようかと模索していたところにクラシエ製薬株式会社のご支援の下、新たに本講座が開設されることになり、特任教授をお引き受けしました。

このような経緯で発足した本講座では、私のこれまでの研究成果も集約して、人参養栄湯を中心に漢方の研究を進めてまいります。

## 強力な布陣でスタートした漢方薬理学講座

乾 本講座は専任教官が、特任教授の私と特任講師の安宅弘司先生、特任助教の宇都奈々美先生の3人です。安宅先生は薬学の専攻で、消化管運動のご研究をされた後に骨髄を中心に幹細胞の研究にも携わってこられたという経歴



をお持ちの先生です。宇都先生は大学院で東洋史を専攻され、漢方の原典を読むことができるという特異な才能をお持ちの先生です。

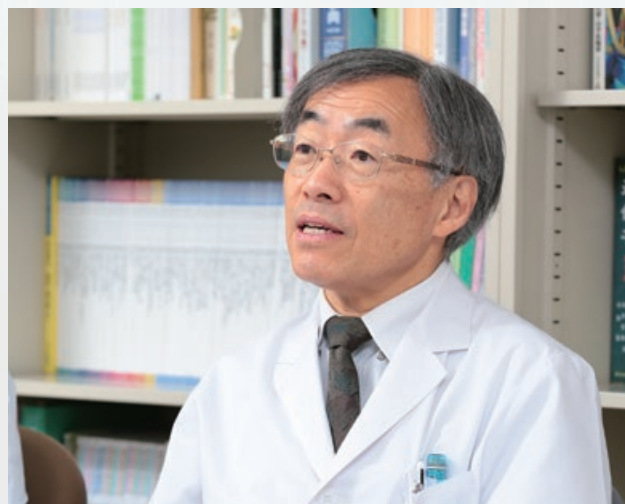
本講座は、臨床医である私と薬学の専門家である安宅先生、そして古典の専門家である宇都先生をコアメンバーとしています。さらに兼任教官には心身内科学分野講師の網谷東方先生が、客員教授には長年、食欲中枢の研究を手掛けておられる矢田俊彦先生(元 自治医科大学生理学教授)と、マイタケMD-フラクションを作られた難波宏彰先生(元 神戸薬科大学微生物化学教授)が参画してくださっています。

このように、多彩で強力なスタッフにご協力いただきながら、一つでも多くの成果を公表したいと考えています。  
**安宅** 私は、以前に生薬成分の医薬品を扱う企業で研究をしていたという経歴があります。そのためだけではありませんが、当時から漢方には非常に興味を持ち、漢方や生薬の可能性を実感していました。その後、滋賀医科大学や札幌医科大学で骨髄幹細胞の研究にも携わる機会をいただいたこと、さらには乾先生との出会うことができたことが、本講座への参画につながっています。

**宇都** 私は大学院で宗教史を専攻していたのですが、中国と日本との物流に生薬も含まれるため、漢方や生薬にも興味を持つようになりました。そして、博士課程からは漢方の古典の研究を始めました。さらに姉が心身医療科の医師であった関係で乾先生と知り合うことができ、先生からお誘いをいただいたことが今につながっています。

#### 四半世紀前から注目していたNPY空腹系

**乾** 私が漢方の研究に携わるようになった当時から注目していたのがNPY(Neuropeptide Y)空腹系です。NPYやPYY(Peptide YY)は1980年頃にカロリンスカ研究所の立元一彦先生が見出された脳腸ペプチドですが、先生からNPYを頂戴して研究をしていました。当時はすでに人参養栄湯が食欲不振に有用であることを臨床現場で実感していましたので、人参養栄湯や生薬がNPYに及ぼす影響、作用点の解明を目的に研究を続けていました。ただ残念なことに、当時は生薬の扱いに不慣れだったことや、薬学研究者との連携が十分ではなかったため、“やり残した”研究



乾 明夫 先生



安宅弘司 先生

となってしまうました。

一方で、臨床において人參養榮湯は使用頻度が高くて高い処方があります。本当に“効く”のです。たとえば、助手に任用されて3年目から病棟医長をしていたころ、悪性リンパ腫の30歳代の女性患者さんの主治医をしていました。抗がん治療による白血球減少で何度となく危機的な時期もあった患者さんですが、その方が疲労感と食欲不振を訴えられました。そこで人參養榮湯を処方したところ、明らかな効果を確認しました。このような効果が期待できる西洋薬はないだけに、“この薬は使える”という臨床医の直感がありました。

漢方の研究は、いつの間にか私の中心になっていました。なかでも、空腹系に対する漢方の影響については長年注目しています。1999年にはグレリンが発見され、現在、グレリン受容体作動薬の開発が進んでいます。しかし、NPYの受容体作動薬については、脳内へ到達させることが困難なことから創ることができなかつたようです。ということは、NPY空腹系に作用して食欲不振を改善する可能性がある薬剤は人參養榮湯です。しかも、われわれは食欲不振を改善したい目の前の患者さんに人參養榮湯を処方することができます。

### 人參養榮湯の幹細胞に及ぼす影響を中心に 研究を展開

乾 人參養榮湯は基礎・臨床ともに多くの検討がなされていますが、中でも造血幹細胞の増殖を促進することはよく

知られており、がんの支持療法に広く応用されています。本講座ではさらに、間葉系幹細胞に及ぼす人參養榮湯の影響を検討することで、人參養榮湯の“若返り効果”に注目しています。もう一つは、フレイルとその基礎疾患として重要な糖尿病について、糖尿病モデルを用いて骨髄や臓器の合併症に対する保護作用など人參養榮湯のメカニズムの解析を進めたいと考えています。さらに、臨床の先生方にもご納得いただけるよう病理学的な解析も進め、原典や古典の記載を踏まえた考察も加えてまいります。

臨床研究については、個々の症例を詳細に検討することで人參養榮湯の効果をより明確にしていきたいと思います。また、“若返り効果”が明らかにされている八味地黄丸などの補腎剤と人參養榮湯の組み合わせの効果についても検討してみたいと考えています。そして、ゆくゆくは老化の本体に関わる研究にまで進めることができるようになることが理想です。

### 新たなエビデンスの構築に向けて

乾 私は、今まで携わってきた学会や行政関係などの仕事から取って退き、これからは漢方研究に特化してまいります。本講座での研究を推進することはもちろんですが、『フレイル漢方薬理研究会』やクラシエ製薬(株)の漢方研究所とも密に連携することで得られる多くの成果を、より広く発信したいと考えています。また、フレイルと漢方に関する論文執筆等のご依頼も多数頂戴していますので、できるだけご要望にお応えすることで、フレイルにおける漢方



宇都奈々美 先生

の有用性を多くの皆さんにお伝えしたいと考えています。そして、老化のメカニズムに漢方を組み入れながら、“古くて新しい薬”として漢方を位置づけ、ガイドラインにも強く使用が推奨されるように研究成果を発信し続けたいと思っています。

**安宅** 素晴らしい機会をいただきましたので、「漢方だから良い」という何かを見つけたいと思っています。現在の西洋医学では、ある複合物質から有効成分を発見し単一物質として医薬品にするという流れがありますが、漢方は“渾然一体とした複合が良い”“生薬が合

わさっているから良い”と思います。たとえば、人参養榮湯なら12種類の生薬を一緒に煎じることによって得られるさまざまな成分による多様な作用が一体となって治療効果を発揮することが漢方の特徴であり、漢方の良さでもあると思います。それがなぜなのか、ということを探明する、すなわち複合成分をサイエンスにすることは非常に難しいことだと思いますが、本講座での研究から何らかのヒントをつかむことができればよいと考えています。それが、漢方の良さをより強く認識することにもつながり、さらには西洋医学を凌駕することにもなると思います。

**宇都** 漢方のいろいろな会に参加して感じることは、漢方に興味をお持ちなのに表現が難解で理解しにくいとおっしゃる先生が非常に多いことです。難解な表現を理解された先生しか漢方を使わない、ということになると、漢方は非常に狭い世界の医学ということになってしまうと思います。私は、古典や漢方の表現の仕方も含めて、分かりやすい形でご提供できれば、漢方の発展に大きくつながるのではないかと考えています。その手助けになるような仕事ができればよいと思っています。

**乾** 漢方を一部の専門医師による“オタク”の世界の医学としてはいけない、もっと広く漢方の良さを伝えなければならぬと思います。そのためには、宇都先生が言われるように、難解な表現を分かりやすくお示しすることで、今まで漢方に興味はあっても処方躊躇されていた先生には使用のきっかけになると思います。また、漢方は長年の伝統がありますが、書物に記載されていることや先人



の口訣のすべてが正しいかどうかということを検証することも必要だと考えています。

本講座は小さいながらも、臨床・薬学・古典の専門家がそろった強力なメンバーで構成されています。今後、われわれの研究成果をより多く、より広く発信することで、漢方を一人でも多くの方々の健康長寿につなげたいと思います。

